

令和6年度第2回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時:令和6年10月4日(金) 13:30~15:30

2 場所:オーテピア 4階 ホール

3 出席者:

[委員]加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

[オーテピア高知図書館]杉本高知県立図書館長、高石高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

[資料1・2]

②次期サービス計画の策定について

[資料3]

③その他

【委員】

議事1について、委員の皆様のご意見をいただきたい。

【委員】

全体から見ると、順調に進んできているのではないかと思う。(資料は)主な取組、成果と課題、今後の取組という形で整理されているが、無理のあるところがあまりない。例えば、目標だけ高いとか、今後の取組でこれはできないということはあまりなく、そういう意味では無理なく進めていると感じている。

冒頭の「資料の収集提供」で出た、継続的な資料費の確保が必要というところについては、資料費の確保の必要性がどこまで各担当の頭の中に入っているかがこれからの課題になってくと思う。

オープン前から今までのオーテピアは、どういうサービスをしていくか、ニーズの受入れをどういう形で行うか、どういう形で情報提供するか、利用者向けのことを一生懸命やってきた。それらがそれなりに成果を上げているのが、今の状況だと思う。だから、そちらはだんだん足元が固まってきている。次のステップをしようというときに足元がぐらぐらだと次のステップを踏めないが、ある程度ステップが固まってきて次のステップに行ける感じになってきている時期だと思う。いろいろなサービスをやっていく活動の先にあるものは2つだと私は思っている。1つは、地域の活性化という意識。行政がどういうことを狙っているか、地域の課題は何か、そこに向かって我々は、それをどういう形でクリアしていこうとするか、課題を何とかしようと思っている人たちをどういう形で支援しようと思っているかを、きちんと見据えておかないと

いけない。もう1つは、我々の活動はあくまでも予算があり、人がいて、施設があって初めて成り立つものだという事。施設は作ってもらい、定数もある程度ついている。今はそれなりに資料費などもつけてもらっている状態だが、これがいつまでも続くものではないことは、皆さん理解されていると思う。だが、いつまでも続くものではないという理解だけでなく、一つ一つのサービス活動をやっているときのひと工夫が、予算の獲得や定数の確保などへどうつながるかという意識は、多分まだほとんど持っていないと思う。今、サービスの方が安定しつつあるという時期であれば、ここのところをすべての職員がきちんと意識することをやってみたらと思う。

どちらかというところ3期の話になるのかもしれないが、下手をすると3期になってからでは遅いかも。オーテピアがオープンしてから今までの間は、県も市も一生懸命頑張って、新しいサービスの展開に味方してきてくれた。だが、これから先、一定程度の利用が確保され、そんなに劇的に利用が増えるわけではないという時期を迎えたときには、そろそろ切りましようかという状況になってもおかしくないと思う。大概そうなる。最初3年ぐらいは図書館の資料費等を確保してくれるが、もうそろそろもういいよねと、減らすと言われるのが大体3年後ぐらいの時期。今の時期にこそ、一つ一つの活動を予算確保あるいは定数確保につなげるという意識を全職員が持ってほしい。それができることによって、図書館が本当に頑張っている、地域のためになっているということを知ってもらうことが多くの人や行政、議会が知ることになり、だから図書館は今の状態を続けてもらいたいというムードが公に醸成されていく。それをやっていただきたい。継続的な資料費と定数の確保がなかったら、絵に描いた餅になるのであえて言わせていただいた。

パスファインダーについて、いろいろなところで触れていただいている。どれぐらい行っているかは分からないが、パスファインダーの存在をいかに皆さんに知ってもらうかが大事。図書館ならではの資料・情報の提供方法の紹介がパスファインダーだと思う。これは他では作れない。本とネットと相談機関を全部ひっくめて紹介することで、この問題についてアウトラインとしてこういうものがあるから、我々に直接相談しなくても大丈夫という意味も持たせることができる。また、抱えている問題を解決しようとしている団体あるいは行政の担当部局と連携していこうというときに、パスファインダーを提供することが非常に大きな力になっていくので、関連団体などと連携するときに新たなパスファインダーを作ることも大事だと思う。

パスファインダーの雛形を作ると進捗管理シートに書いてあった。県立図書館の話になるが、高知県内の市町村の図書館には、残念ながらパスファインダーを作る能力はまだないと思う。能力という言い方は少し失礼かもしれないが、人的な体制がそこまでは整っていない。となれば、オーテピアが作ったパスファインダーの一部の欄を空けておいて、そこに彼らが持っている資料あるいは彼らの近くにある相談窓口を入れる形。例えば、オーテピアが全体の8割を作り、2割に自分たちが持っているデータを入れれば、その館のパスファインダーができるというような提供の仕方をどんどんしてほしい。そうすれば、彼らは自分たちの窓口でパスファインダーを並べることによって、図書館のイメージを変えることができる。オーテピアが資料提供をすることによって市町村立図書館が良くなっている、自分たちの図書館をオーテピアがちゃんと支援してくれているということが、このような形で目に見える機会はあることではない

と思う。

今日も佐川町で話を聞いてきたが、図書館行政に携わる職員の中でも、課題解決が中心には座っていないということを実感して帰って来た。図書館は、地方であればあるほど、課題解決のための情報提供をする場所だということを知ってほしい。オーテピアから情報提供をすることによって、オーテピアがいろいろな形で応援してくれているということを県全体ですらに実感してもらえと思う。

市の場合、本当は有力な分館にそういったことをやってほしい。「オーテピアはこれだけのものを持っていて、うちの分館にはこういうものがある。だから使ってみてほしい」といった活動を分館の職員が行うときに、例えば、分館の職員自身が、よく借りられる本のことしか考えていないという状況があるとすれば、それを分館でも課題解決をきちんと考えてやるべきだという意識に変えるための道具としてパスファインダーが使える。コテピアという取組をしているが、そのコテピアの材料の1つとして、オーテピアが作ったパスファインダーを使うのはありだと思う。そういった意味合いで、パスファインダーが一番分かりやすい例。オーテピアが作ってきたサービスを展開していく先には、分館や市町村立図書館がそれをいかに受け入れて自分たちの血肉にしていくかが、これからますます重要になってくると思う。

それから、分館・分室でこれだけの貸出実績があるのはすごい。これらが伸びていくことを次のステップの中で考えなければいけない。オーテピアがどんな材料を提供できるかを意識し、例えば、パスファインダーも、地域で使われやすいものというテーマをあえて選んで作ってみるといったことも含めて、戦略的なものとして見てほしい。

繰り返しになるが、これから実績が比較的安定し、劇的に変わる時期ではなくなってくるなら、今言った要素をきちんと踏まえた上で、次のステップ、あるいは次の戦いの準備をしていていただきたい。

【事務局】

予算について、今は何とか確保しながらやっているが、毎年度苦勞している。また、職員配置については、高知市全体で欠員が多く出ている厳しい状況で、図書館だけが特別扱いにはならない。そのような中、行政支援をはじめ、いろいろなところにアピールはしているが、それが十分につながっているかということ、まだまだそこまでいけていないと思う。今後も続けていくが、先ほどの話をお聞きして、職員一人一人のやる事が予算や人員の確保につながっていくという意識が、本当に大事だと思った。職員には予算のことも話はしているが、自分たちの働きが予算のどの部分に、どんなふうにつながっていくのかということを感じている職員がいるだろうか、館長としてそのことをきちんと説明しきれているだろうかと振り返ったところだった。

また、3期に向けては、そこをしっかりと考えていかないと、縮小されるとは言わないが、大変危惧する部分だと感じている。

【委員】

繰り返しになるが、予算のことを館長や予算担当が一生懸命考えて、財政当局に話すのはある意味当たり前。だが、それで予算を獲得できるかといったら獲得できないと思う。そうでは

なく担当が、今自分がやっていることにひと手間加えて、予算の獲得につながるようにするにはどうしたら良いかといったことを、日常的に自分の頭の中のどこかに置いておく。何かをやるときに予算のこともきちんと考えながらやり、例えば、館長の方から、そこまでやるのだったらこういうこともしてはどうかといったキャッチボールができれば。

自分たちの活動、サービスは当然、利用する人たちのためであるが、サービスをきちんとやるだけではなく、それを予算につなげるという意識を常に持った職員がいないことには、上の人たちがどんなに頑張ってみても獲得できない。よほど戦い方を知っている人間だったら別だが、そうでなかったら本当に無理。

図書館には、予算をつけるための法律や国庫補助金がない。そういう状況の中でやっている。そこで僕から言ったのは、図書館にはロビー活動をしてくれる団体もないということ。同じことを農業や林業で考えてみると、お金をちゃんと出ささいと書いてある法律がたくさんある。中山間地域の農地を守るためだとか。それに伴って国庫補助金があるので、県は予算をつけやすい。農協をはじめとして応援してくれる団体もたくさんあって、その人たちが議員にもどんどん働きかけをしている。そのような状況と比べてときに、予算の世界の中で図書館がいかに無力かということをよく理解してほしい。今はさすがに少ないかもしれないが、昔はそのイメージを持たず、理解してくれない行政が悪いと言う図書館の関係者が山のようにいた。それは違うと思う。絶対に間違っている。自分たちがどういう努力をしたかをもう1回考えてみないと。そういう状態で予算を切られまくった図書館を山のように知っているし、繰り返したくない。オーテピアがその轍を踏むことだけは避けてほしい。

【委員】

個々のサービス実績は、都道府県立図書館の水準、あるいは県庁所在地の市立図書館の数字と照らし合わせても、そこそこクリアしている。皆さん本当に日常の業務を頑張っていて、その成果が表れてきていることを誇りに思っていたらいいし、プライドを持っていただきたい。いつも話しているように、高知モデルを論文や論文と言わなくてもエッセーみたいなものでもいいし、それをいろいろな場で発表する時期に来ていると思う。が、先ほどおっしゃったように、安定期に入るといふか、一時注目されて実績を上げた図書館がいつの間にか消えていってしまうというのは、もう本当に枚挙にいとまがない。建物を新しくして斬新なサービスを実施すれば、市民の人たちがわんさか押し寄せる。でも、3年目5年目ぐらいになると実績が落ちてくる。これを3年あるいは5年の壁と言いが、そういうときが必ず来る。そこをクリアできる図書館はなかなかない。ある程度の実績を達成するために何とか頑張るが、それを20年、30年維持していくとなると、達成することより維持する方が難しい。そういう時期に入りつつあると思う。駄目になっていく兆候は、サービスの質を表すリクエストやレファレンスから少しずつ出てくるので、この辺の数字が伸びていない、あるいは若干減少という傾向は少し心配。

例えば、来館者数はおそらく今年度も、上手くいったら100万人に届くのではないかという数字が出ているけれど、心配なところも少し出てきているという気がする。

日本の図書館全体ではサービスの実績が落ちてきており、これはネットやデジタルの影響だ

ろうという話がまことしやかに言われていて、全世界的にそういう傾向ではないのかと何となくみんな思っている。実際はそうではなく、アメリカの公共図書館は来館者数、貸出者数とも増えている。日本よりよほどネットが発達しているのに。そのために彼らはいろいろな戦略を練っている。コロナのときにリアルな図書館は日本と同じように閉館したが、非来館型サービスをどんどん行って、サービス実績はそれほど落とさずに済んだ図書館がたくさんあった。日本の図書館はただ閉めただけ。コロナ禍が過ぎてもその反省がないし、新しい手を打つ図書館もあまり出てこない。そういう辺りを少し考えないといけないのではないか。

アメリカでは例えば、書店についても、独立系の書店の店舗数が実は増えている。そういった書店の売上げも、全体として増えている。だから、何となくそのようなものだと思うのは非常に危険なわけで、いろいろやれる可能性はある、実績を伸ばせる可能性があるというふうには考えないとまずいのではないかと思う。

そして、予算の話。例えば、アメリカでは、予算のことは司書という専門職の仕事の範囲。日本では、専門職は与えられた予算の中で、専門的な仕事、選書やレファレンスをすれば良いという感じがなきにしもあらず。私も若い頃はそうだったのであまり偉そうなことは言えないが、アメリカの専門職は予算を獲得するところまでが仕事の範囲。だから常に闘っている。闘っている内容は何かと聞くと、「予算を取るために闘っている」と。ボランティアも、予算を増やさなければと議員に一生懸命アプローチしたりしている。お金がないと何もできないので。

特に専門職の職員には、自分の仕事の範囲がどこまでかをぜひ考えていただきたい。予算を獲得するためには、サービスの数字、実績が必要なので、先ほど話したように、数字自体が落ちてくると予算要求しづらくなってしまう。あるいは、先ほどもおっしゃったように、もう予算を切るという既定路線があったら、サービスの数字が落ちてくることを待ち構えている。数字はものすごく大切なので、先ほど話したように、数字を上げていく努力をしなければいけないが、数字はサービスだけしていても上がらない。図書館の数字、サービスの数字は総合力だと思う。トイレが綺麗になっているか、図書館の中の空調がきちんとなっているか、外観が汚れていないか、また、職員のアイコンタクトがあるか、接遇がどうかも含めてなので、特に、専門職の皆さんの仕事の範囲をぜひ広げていただきたい。その総合力が数字に結びつき、予算になっていくと考えていただきたい。

そういう意味では苦言を呈することになる。昨年度だったと思うが、図書館の周りを歩いて外観全部を見て、木製の部分が半分傷んできているので早くエポキシ樹脂でも表面に塗るなり、表面を薄く削るなりしたほうが良いと話したと思う。今回また回ったら、表通りの方にある木でできた腰かけところが腐り、一部板も剥がれて使用禁止と貼ってあった。これは仕事の範囲としては、総務系が備品として管理されているだろう。でも利用者から見たらそれは分からない。ものすごくチープ。外の北側のところもまた退色が進んでいる。すごく貧乏くさい汚れた感じになっている。職員の方は大体通用口から入って通用口から帰ってしまう。表からどう見えるかをなかなか見ないのはオーテピアだけでなく、すべての図書館に当てはまること。だが、利用者は外から見ている。

例えば、ホテルの支配人のことを考えていただければ。ホテルの支配人は、おそらく全部目を配ってチェックしている。だから図書館員たるもの、図書館がどう見えるかということに、ぜ

ひ気を配っていただきたい。先ほどのベンチの件に関しては、もう座れないのであれば早く撤去したほうが良いと思う。修理できないのであれば、撤去したほうが良い。そういうことも営繕とか総務の仕事ということではなく、図書館員の仕事だと思う。これはもう早く撤去してすっきりさせたほうが良いとかそういう判断も皆さんでしていかないといけないと思う。つまり仕事の範囲を勝手に決めては駄目。特に、専門職の皆さんは仕事の範囲を広く取って、取り組んでいただきたい。

【事務局】

今日は特に雨なので、木の部分は余計汚れて見えるかもしれないが、実際に使えない部分があるのは事実。そこだけをとらえておっしゃっているわけではないと思うが、そこについては、今見積もりを取って動こうとしているところ。ただ、それだけではなく、開館のときから言っているオーテピア全体のブランディングにも関わってくるので、やるかやらないかの判断も含めて、そのことに意識がいく職員が施設管理の担当だけではいけないという意味で言うと、現在、ブランディング担当職員が全館を通じて動いてくれている。やはり外からどう見えるかということ意識しないといけないと思っている。

【委員】

資料 1、2を拝見し、いろいろなことが順調。1つ申し上げるとすれば、良い悪いということではなく、電子書籍の利用状況が少し非線形というか、他の指標は目標達成のめどが立っているか、極めて高い確率で達成できる気がするが、これはR5にも届かないかとも思っていて、もし何かあったらご説明いただければと思う。ただ、私個人はしめしめと思っている。私は電子書籍をあまり絶賛はしてないので、これで伸び悩むのだったら、それはそれで3期の課題かということも考えている。

それから、この後の3期の話も考えると、図書館の皆さんの活動量がどのくらいなのかというのは考えていかないといけないと思っている。資料 1、2で書いてあることをやるのが、エフォートで言うともうほぼ100%とか110%とかになっている。3期に向けてやっていくこととのバランスがなかなか難しいと思う。だから、3期に向けて少し考えたり、新しい企画、拡張をもしやるとすれば、今、2期でやっていることを省力化する、あるいは効率化するなど、いろいろ方法はあると思うが、少しこういった考え方も持っていないと3期に新しいことをやるマンパワーがないのではないかという危惧もある。今、懸念してるのはこの2点。

【事務局】

電子書籍の関係だが、今年度に入って、思いのほか伸びてないということが数字から明らかになっている。

去年の7月から新たに KinoDen を導入して、一般の読書というより、学校で言えば探究学習や調査研究などにも役立ててもらえるような書籍の量をそろえている。体験フェア的なことも2回ほど実施したが、我々の周知の努力がまだまだ不足している。今年度は、特に去年導入した KinoDen の周知に取り組まないといけないというのが課題。

また、ホームページから電子図書館に入って、そこから KinoDen に入る入り方が少し分かりにくいことも課題。電子図書館、KinoDen、Kono Libraries と、3種類の電子書籍サービスがあるが、ホームページ上で違いがほとんど説明されていないといった、すぐに取り組みなければならない課題があることを我々も理解はしているので、そこは対応していきたい。

それから、活動量について、行政との連携は、連携先が年々増えてきているので、新しい機関と連携を組もうとしたときに、少し関係が薄くなっている機関とはしばらく休みにして、濃淡をつけないと新しい取組はなかなかできないといった話もしている。利用先を広げつつ、全体の底上げができればと考えており、関係が薄くなっているところは、切り捨てるわけではないが、連携を緩めることもあると思う。一定の関係ができて、図書館の方が少し後ろに下がったとしても、推進力みたいな形で進んでいくところも増えてきているので、そういったところは引き続いてやっていく。新たな連携先の開拓もある。これまで全く連携ができていなかった療育福祉センターと児童相談所へ、今年度は私も含めて訪問して新たに関係づくりをし、児童相談所とも連携してできることを見つけてやっていくようにしている。そういった新たなところを開拓しながら、全体としてサービスが進んでいく形で取り組んでいきたい。

そういう面では当然、プラスばかりではいっぱいいっぱいになるので、全体の環境の見直しも含めて、自分たちのできる範囲でしっかりやっていくという話は、日常的にしている。

【委員】

皆さんの意見を聞いて、私も基本的に同じ方向性。先ほど指摘された予算の問題に関しては、私は少し悲観的。人口減少、少子化、高齢化ということから考えると、日本の経済は良くて現状維持ではないかと。可能性が高いのは、縮む方向ではないかという気がして仕方がない。

図書館の予算の維持、資料費の確保は絶対だと思う。なおかつ情報の重要性はますます増えていこう。それから、生成AIなどの利用に関する能力の向上なども担っていかないといけない。けれど、全体的な予算規模は多分伸びない。現状維持が精一杯のところ、仕事だけが増えていく。杞憂であれば良いが、当然、経済状況が悪くなってくれば、人員の確保を守らなくなるという方向へ行くような先行きが見えてくる。その中で第3期の計画を考えなくてはならないというふうに今回の資料を見た。そういう視点からだ、いろいろな問題が見えてくる。これまでの委員の指摘は非常に大事だと思うので、それを実現する形で頑張っていくしかないと思う。

高知も外国人が随分増えているし、多文化への対応でいろいろな言語の資料を集めている。確認したいのは、外国人ユーザーに実際に意見を聞いたのかということ。利用者が来たら、いかがですかと声をかけるとかして、母国の図書館のあり方とはどう違うのかについて生の情報を入手し、書籍の充実を図るのか、それとも、国際交流課や日本語の指導者から間接的に得た情報で、これはどうかという形で集めるのか、やり方によっては少し違いがあると思う。そういう面で、今までのサービスの見直しという視点から見ると、ユーザーからの直接の意見を集めることが大事だと思う。そういうことをして、上滑りではない本当に役立つしっかりしたサービスを心がけるべきだと思う。

時間もあるので、3期を考えるとときには、まず、そういう形でサービスをもう一度洗い直す。

あとは、広い意味でオーテピアの支持者を増やす。もっと言えば、個人というよりいろいろな組織、学校、その他、つまり、オーテピアに頼り切るわけではないが、オーテピアがなくてはうちは何ともならないのでぜひ頑張ってほしいといった支持が得られる活動。それが、皆さんがおっしゃったような予算の獲得の一番のベースになると思う。例えば、図書館の予算が削減されたらうちも困るといった声が、図書館だけでなく各方面から上がるようないろいろな提携や支援、形を模索していくことが多分必要になってくるだろう。3期にそれを明記することになるかもしれないが、3期の計画を実りあるものにするためにも、今からそういう面での活動に力を入れることが必要だと思う。

【事務局】

外国人の声を聞くという点については、イベントや、間接的には県だと国際交流課、国際交流協会などを通じて意見を聞くのは当然やっている。直接聞くという部分では資料2の9ページの「成果と課題」欄の上から2つ目「主な取組」の一番上にも書いているとおり、今年度から外国語版おすすめ本アンケート用紙を設置している。いわゆる外国語版のリクエスト用紙。英語だけではなく、国際交流員が出身国の言語を和訳してくれている。まずは、そういったアンケート用紙を設置している。一部回答があるが、全体としてPRがまだ進んでないところもあって、そこが課題になっている状況。

また、直接声を聞くということでは、後ほどの議題になると思うが、来年度、次期サービス計画策定にあたって、外国人アンケートを初めて実施しようと計画している。外国人と言っても一括りにはならず、出身国はさまざまなので、こういった形で実施するのかをこれから詰めていこうと考えている。

私は2年目になるが、昨年度に比べて開架で外国人を見かける数は明らかに増えてきている。高知県内の外国人の数自体も増えてきているので、それに比例する形で、オーテピアも利用いただいているという実感はある。

【事務局】

当事者、またその家族も含めてというところでいくと、高知市では外国人・帰国子女という言葉をしているが、学校現場で当事者に対応する担当の教員も増えている。教育研究所と情報共有して、そこから当事者とその親、それから支援をする先生方とも連携して、資料面でできることがあると考えている。今、担当が新たなブックリストを作ってくれているが、そういった形で取組みながら、ニーズをとらえていくようにしたい。

【委員】

これはつい昨日ふっと思いついたことだが、外国人の子ども読書のためのボランティアを養成することができたら良いという思いがある。なぜかというと、同じ国の出身者の方は割と広いネットワークというか、横のつながりがあるように思う。そういう方にオーテピアのボランティアになっていただければ、いろいろなところで情報がきちんと伝わるし、メリットがあるのではないかと思った。

【委員】

AIへの対応について。あつという間に生成AIの利用が進んで、3期を待つところまでいかないという状況。能力的にも高くなってきているが、実際に生成AIを使いこなせている人はとても少ないのではないか。無料と有料の生成AIでは使い勝手が全く違うが、図書館がこれをどれぐらい早く取り入れていけるかということ。これまで、データベースや書籍などさまざまな分野で、図書館は情報の面で圧倒的な強者だったと思う。大量のものを抱えていて、利用する人たちからするとその力量、物量の差が余りにもありすぎるところがあったが、ここで生成AIが登場してきて、これを的確に使いこなせば、かなりの情報がきちんと手に入るという状況がこれからできてくる。

インターネットが出てきたときに図書館は要らないんじゃないかという話があったが、例えば、Googleで調べると、国の機関から情報を取ってくるノウハウ等をきちんと持っていて、システムがある図書館では、図書館の方が圧倒的に強かった。だが、これから先、生成AIを使いこなせる、つまり、的確な質問がきちんと作れて、自分がほしい情報が取れる人たちにとっては、図書館という存在が相対的にかなり小さくなる可能性は高いだろうと思う。

その一方で、図書館が生成AIを十分に使いこなせるようであれば、優位性だけでなくチャンスもある。生成AIの使い方の指導などさまざまな情報を提供できれば、まだまだ図書館は我々にとって情報を得るための重要な場所だと、もう一度認識してもらえる。

今の時期に何をすべきか、これは3期を待つべき話ではないと思う。もう直ちにというぐらいに、全員とはいかないかもしれないが、それぞれのグループの中に何人かは生成AIを十分に使いこなせる職員を抱えることができれば。問題の設定がきちんとでき、意味不明な答えが返ってくることを防ぐことができ、的確な情報が得られる。なおかつ、手に入れた情報が本当に正しいものかどうかをきちんとチェックできること。このあたりになってくると図書館の優位性が出てくる。すでに生成AIを使いこなそうとしている人たちは世の中には結構いるので、その人たちが図書館よりも先行していく形になってくると、相対的な話になるが、最終的に図書館を使わなくても大丈夫という話になってしまう。

情報に敏感な人たちがそういう傾向を持ち始めるのは、図書館にとって非常に危険な兆候だと思われるので、この点については3期と言わず、今の段階から3期の先取りをする格好で進めることを考えてはどうかと思う。

【事務局】

生成AIの関係、以前からこの委員会でもご意見いただいているので、当館でも3期ということではなく、現状でも使えるものを使っていこうというスタンスで研究はしている。

ただ現状ではいろいろなパターンで質問をしてその答えを見てというやりとりはしているが、直ちにそのまま使える、ほぼ手直しなしで使えるレベルに達しているソフトは、現時点では私どもは見つけれられていない。

ただ、レファレンスの際に参考になるような膨大なデータ量が当然あるので、はっきり分からない書名の検索に近づけるためにAIを活用し、一部ヒントを得るといったところで活用でき

ている部分もある。常々アンテナを高くして、図書館としてしっかり使えるものは置き換えていきたいと思っているけれど、現時点では研究の途中の段階。

【委員】

情報の必要性で言えば、首長部局、それから、試験研究機関なども多分同じことが言えると思う。例えば、図書館から、一緒に生成AIの研究をやらないかと働きかけて、県・市の情報担当部局、それから、どこが乗ってくるか分からないが、商工関係の試験研究機関であれば、ある程度乗ってくると思えるし、情報センターのようなところも良いかもしれない。そういうところに強い関心を持つ、あるいは、そういったものをある程度先取りすることによって優位性を保とうという意識が多少でもある機関と一緒に研究グループを作り参加することによって、オーテピアの職員の研修にもつながるような形を取るのも1つの方法かと思う。怖いのは乗り遅れ。世間に比べて図書館が遅れてると思われるのだけはどうしても避けたい。そこが崩れてしまうと、図書館は情報提供することによって地域を支えるという看板が、あれは嘘だという話になってしまう。そういったことも含めて少し検討してほしい。

【委員】

私も第3期のサービス計画策定の際の重要なポイントは、先ほどおっしゃったようなことだと思う。

アルビン・トフラー、私ぐらいの年代の方は皆さん知っている名前だと思う。トフラーの『第三の波』は昔読まれたもので、これがまた最近、再評価されているということだ。一般的に、変化は大変な問題だというのが、この中でトフラーは、変化そのものが問題ではなく、問題は変化のスピードだと言っている。私はここがすごく大きなことだと思っている。おそらくこの10年ぐらいが、世界の大学図書館や公共図書館の大変革期になると思っている。

欧米の図書館は、いわゆるラーニング・コモンズみたいな交流空間を取り入れるのが大きな流れになっている。ニューヨークにはミッド・マンハッタンという巨大な貸出専門の図書館があって膨大な貸出をしていたが、実はここが大改築をして、いわゆるラーニング・コモンズ、交流空間を作り、象徴的な出来事だと言われている。

もう1つはデジタル、AI系だと思っている。インターネットが出てきたときも、インターネットがあれば図書館は要らないという俗説があって、インターネットも使わない議員がよくそんなことを言ったりした。例えば、Google を使って論文を探すのは無理。図書館員は CiNii や国会図書館の雑誌記事検索を使うことを知っている。検索するときのキーワードは、例えば、私たちはよく盲腸と言うが、虫垂炎で引かなければ論文はヒットしない。例えば、錯覚についても、素人は錯覚と言うが、学術的な錯視というキーワードを使わないとヒットしない。だから、CiNii を知っているだけでは駄目だし、そういった学術的なキーワードをシソーラスで探せるスキルがあるから、素人では探せないものを図書館員は探せた。AIも皆さんご存じのように、質問のことをプロンプトと言うが、質問の仕方で回答が劇的に変わる。このプロンプトの作り方についての学問が今かなり発達してきて、AIに対して質問する専門家のことをプロンプトエンジニアと言って、アメリカでは一番高い人で年収 5000 万円ということだ。

ハルシネーション、いわゆる間違いはあるが、このハルシネーションを防ぐためにAIにAIをぶつけるという技術、それからあることを探すときに必要なプロンプトをまずAIに投げてAIに考えさせる。こういった高度な技術が今発達し始めている。

こういう研修をきちんと受けて、スキルを身につけることが、図書館と図書館員が生き残っていく道だと思う。素人が幾らAIを使っても、求めるものにほど遠い答えしか出てこない状態に比べ、図書館に行って司書に聞けばとんでもない高度な答えを引き出してくれるということになる。問題はスピード。だから早く着手しなければいけないと思う。特に、私は担当の司書、職員の方たちに訴えたい。

40年以上図書館の世界に身を置いて唯一良いことがある。それは、図書館の世界で何が起きてきたかをこれほど長い間見ている人間はあまりいないということ。そこでつくづく感じるのは、新しい技術が図書館に導入されたときにどうだったかということ。必ず図書館界は大反対。消極的な反対まで入れたらほぼ全員が反対。まず公開書架。昔、本は全部閉架書庫に入っていた。公開書架は安全接架とも言った。利用者に本を選ばせる開架書架にするだけでも大反対。その次は、貸出し。昔の図書館は貸出しをしていなかった。貸出しをすると言ったときにまた大反対。次は、コンピューターの導入。1980年代の初め頃、私はまさにその頃に現場に入ったのでよく覚えてるが、コンピューター大反対。次に、BDSが入ったときは、利用者を泥棒扱いするのかと大反対。だから、大反対の歴史。だが、そういうものは、今は当たり前になっている。だから、おそらくAIを使うのは反対、または何となくもやもやしてる人がたくさんいると思うが、これは当たり前の話で、早く導入しないことには話にならない。都立中央はもう利用者向けにAIレファレンスサービスを始めている。だから早く着手しなければいけない。オーテピアではセルフ式貸出機を提供していて、圧倒的に多くの利用者が使っていると思う。日本の図書館ではご存知のように、窓口の仕事の8割から9割は貸出・返却だった。それがなくなったのだから、専門職は何をするのかという話。私はおそらく日本の公共図書館は2極分化すると思っている。自動の装置を入れて、貸出・返却の仕事がなくなり、ああ楽になったと言ってみんな事務室に引き上げる図書館、これが大半。おそらく人員が削減され、予算も削減される。

もう1つは、空いた時間に今までできなかったレファレンスサービスや、いろいろな専門機関との連携をやろう、課題解決型を広範に展開していこうという図書館。これはきっと少ない。でもこういう図書館しか生き残れない。これから2極分化が始まると思う。だから、そういうことを想定して、第3期計画を作っていくことだと思う。第3期計画は5年。これからの5年は一番重要な時期だと思う。またパンデミックが来ることは明らかなのだから、先ほど話したように、パンデミックのときにアメリカと日本でどのくらい差があったかを考えてみてほしい。例えば、図書館に行かなくても図書館サービスが受けられるとか、Zoomでレファレンスを受けられるとか。著作権の処理はいろいろ面倒だったと思うが、アメリカの図書館ではZoomでおはなし会、映画会、講演会などを当たり前のようやっていた。図書館に来られない人がたくさんいるのだから、私は非来館型サービスを進捗させていくのが1つの方向性だと思う。

自動化することによって、24時間対応もできる。民間企業のコールセンターのことを考えれば、例えば、県単位でいろいろな図書館がお金を出し合って、地球の反対側にレファレンスコールセンターみたいなものを作り、24時間レファレンスに対応することだってできる。だからと

いって、それをやりなさいという話ではなく、そういうことだってできる可能性を、私たちはすでに手に入れている。だから、やるかやらないかの話。なので、そういうことも含めて検討していかなければ意味がないと思う。ただ、今までやってきたサービスの量的な拡大というだけの第3期計画では問題であって、質的な変革を考えないと、これからの5年から10年は大変革期なので、それに対応するような計画を立てないといけない、そういう重要な時期になっているのではないかと思う。

石破政権になり、石破さんは地方創生、地方にお金だけ出して地方で考えさせようと言っている。それは、チャンスなのではないかと思う。ここにある高知県の政策。これは先日も、元鳥取県知事、元総務大臣の片山さんがテレビで言っていたが、今の県の政策は国から予算をもらうために、国の政策に合わせた政策を作っている。こういうふうにやれば予算あげるよと言われるから、それに合わせた計画を作っている。そうではなく、本当に高知県に必要なものは何かということも含めて、図書館の第3期計画を作っていく必要があるのではないか。

【委員】

3期について、1つは基本方針の2番にもある課題解決の支援が拡張するのではないかということが、多分テーマになると思う。

レファレンスサービス等で解決方法が得られれば解決するという課題もあるが、地方で発展することを考えると、課題というのはだんだん重くなっていくだろうということを思っている。

例えば、使い古されたことではあるが、新しい製品などを作ったときに物語性が必要だとよく言われるが、本来の意味から言うと、ビジネスを推進するために、何かこの新製品に物語がついていかないかとか、あるいは、物語を説明できたら良いということが分かっただけでは、解決とは言えないのではないかということになってくるだろうと思う。そういうものがあれば良いよねということが分かるぐらいでは解決にはならず、本当に解決するのであれば、その物語が作れないと駄目だろうということ。

これをどういうふうにとらえれば良いかということ、図書館の提供によって情報を取得して、直接的に課題を解決するだけではなく、利用者が情報を加工し、それを発信するような能力も獲得していかないと、全体的な課題解決とは言えなくなるかもしれない。図書館の機能自体として、利用者が情報を自ら加工したり、あるいは、情報発信をしたりということができるような枠組みというか、プラットフォームというか、場所というか、そういったあたりも提供できるように拡張していかないと、真の意味で課題解決を提供することにはなっていないかもしれないと、最近考えている。

また、問題点として少子化や人口減少という話もあった。さまざまな課題はあると思うが、人口減少について1つのやり方としては、少ない人数でも同じ仕事量がこなせるよう、先ほどお話に出たAIのことも含めた効率化、また、発展のための何か技術的なことも含めて、図書館が包括的にアドバイスしていくようなことになるのではというのが私の今後の予想。

レファレンスサービスは非常に重要だが、図書館や司書の限界ではなく、書籍の限界もあり、ある本を1冊読めば全てが解決するという、そんな魔法みたいなことはない。何冊も読み、それで実際にトレーニングしていく、あるいは、実際に自分でやってみることが必要だと思う。トラ

イアンドエラーみたいなところまで図書館が提供できたら素晴らしい。例えば、情報発信をしたときに、ワークステーションクラスのパソコン、ソフト、カメラを自分で買って動画を撮るとするのは非常にハードルが高い。図書館に来れば入門的なものは使えますよとか、そんな形で、ユーザー自身が発展する能力を高める手助けができないかという視点を、私自身は3期で持てたら良いと考えていたりする。

【事務局】

来期に向けて、デジタル化など世の中が大きく変わっていく中で、個人的にはとても不得意な分野なので、かなり勉強しないと、大きい方向性や事業についての話がしにくいということを感じていて思った。

人口減少の話で言えば、計画等には、当然、デジタル技術の進展への対応といったことは書いているので、今あるモノを上手に活用して、必要な人に効率良く届けることを考えていかなければならないが、一方でそれ以上にデジタル化がすごいスピードで進んでることを大変実感した。経費がかかることかもしれないが、これは本腰を入れて研究を進めていかないと取り残されていき、二極化されたもう片方の方に進んでいくのかなと感じた。

【委員】

今、大変素晴らしいお話をいただいた。そのこと自体が、実は利用者にとっては先行的な雛形になるかと。例えば、図書館の皆さんもデジタル化やAIが進展していろいろ考えなければいけないと悩んでいると思う。けれど、図書館がそういうことに取り組む中で、例えば、一般の方や商業をやっている方にも同じ思いはあると思うので、図書館はこういう形で進展させたといった内容であっても、情報提供としては有益かと思った。

【委員】

アピールが出てきているというのがうれしいなと思っている。

高知県でもうすぐ公共図書館の研究集会があるが、その中でオーテピアは何を発表するのか。

【事務局】

今回は「地域と協働し地域の学びを育む図書館」をテーマにしている、オーテピアの実践報告はない。県内では梶原町立図書館の取組について、どちらかという建物に注目されがちだが、しっかりとした全域サービスをしており、人口は少ないが正規の司書を複数名雇用しているといった状況をお知らせしたいという思いで、事例の1つとして取り入れている。

【委員】

本当はオーテピアの報告をやってほしかった。というのは、鳥取県立図書館の場合は、私が館長2年目のときに研究集会を引き受けた。ちょうど良いタイミングだったため、鳥取県立が今何を考えているかの話をしようということになった。内部的には中堅の司書に発表させよう

と思っていたらしいが、内容自体に一番精通しているのが私だったので、私が発表した。それから注目してもらえるようになった。鳥取県立はこのような新しい建物だったわけでも何でもなく、自分たちで勝手に始めていたいろいろなことを発表して注目された。もう1つは、私が館長になって2年目から、新任館長の研修会でパネラーや講師を引き受け始めたので、そこで注目してもらったというのもある。

注目してもらったことによる効果が2つあった。1つは、それまで中国地方の中でも後ろをいっていると思っていたのに、いろいろな取組を始めたらみんなに注目され、サービスが評価されると職員が思ったこと。

それから、もう1つは私の戦略で、これだけの人たちが視察に来ているというデータを各署に配った。議会が来るのは大変喜ばしいことで、この県、あの県から来たとやたらに書いて、うちの県の図書館がこれだけ注目されているという資料を議会や知事のところに持って行ったりした。そういう意味では、外向けのアピールと良い意味での内部のプライド造成みたいな感じ。自分たちがやっていることの再評価ができたので、せっかく機会があるのであれば、オーテピアが頑張ってきたことを話しても良かったのではないかと思ったのが一つ。

同じようなことと言えば、今度の全国図書館大会の中で多文化サービスについて発表しようということになったことは、誠に結構だと思う。ただ、今回残念なのは、発表がインターネット配信のみということ。本当は多文化サービスで頑張っている人たちとの交流というところで、もっとプラスが出てくるのかなというのがあるが、とりあえず多文化サービスを打ち出して、この特長としてアピールするのは結構なことだと思う。

それから、ライブラリー・オブ・ザ・イヤーの一次選考にオーテピアの名前が出ていた。なぜ二次選考で落選したのか。「これ」というところをつかむ方がライブラリー・オブ・ザ・イヤーでは選ばれやすい感じがあるので、いろいろと幅広くやっているオーテピアは、ある意味特長が出にくいかもしれない。だが、とりあえず一次選考で名前が出てきたということで、個人的には喜んでいる。

これらのことで何が言いたいかということ、自分たちがやっていることを中だけでなく、積極的に外に向けて打ち出して、もっと仲間を作ろうということ。あるいは、我々がやっていることをきちんと世間が注目してくれるようにアピールをする。このサービスをもっと勉強してみたいという人たちが集う場所になってくること自体も、この図書館を守るという意味で言えば、実は意味のあることだと思う。

もう1つは、少し細かい話になるが、学校との関係。学校にはいろいろな職員がいて、学校の図書館にはさまざまな立場の職員がいるので、まとめて研修をするのがなかなか難しいことは分かるが、そうは言ってもその人たちを育てないと、学校図書館は良くなっていかない。そのあたりの戦略。今までの状況を踏まえた上で、どこをどういうふうにやっていったら、もっと学校図書館が積極的にいろいろなことをやって、公共図書館の利用、あるいは、子どもたちの情報に対する感度の高さにつなげていけるのか。子どもの数が少ない状況で、これは非常に大事なことだと思う。学校図書館が頑張ってくれる状況を作れるのは誰かと言ったら、学校の中にはいない。彼らはもうそれだけの力を持っていないから。できるのは、オーテピア、県・市の教育委員会、そういったところが積極的に、我々はこういうことを提供できるからやりません

かという形で、声をかけてあげるとのこと。このあたりをもう少し深めて、次の計画につなげていってほしいと思う。

【事務局】

学校図書館との関係では、高知市の場合、学校図書館支援員が全校に配置されており、主管課は別だが、そこでの支援員研修で、オーテピア高知図書館が研修講師を行っている。支援員もベテランとそうでない人がいるため、レベルに合わせたきめ細やかな研修をしているところ。

ただ、学校図書館の環境が本当に悪く、資料費も多くはないけれど、GIGA スクール端末の導入の関係でWi-Fiやいろいろなものが整備されたタイミングで、学校図書館にはインターネットがつながっていなかったことや、GIGA スクール端末の導入後もパソコン等の整備がなされていなかったことが分かった。翌年度からはお願いして整備してもらったが、要は、うちの情報も紙ベース以外はどのように入手していたのかと。高知市でそういう状況。

少しずつ環境が整ってきた中で、支援員研修を活用しながらということと、今、ちょうど高知市の第四次子ども読書活動推進計画を策定中なので、学校図書館の主管課である学校教育課や、設備等を整備する学校環境整備課など、関係課が集まって話をしているところで、改めて、高知市の学校図書館のシステム化も含めて、大変遅れているという認識をした。学校図書館は、当然、学校図書館法の中で学校がやるべきだという意見もあるけれど、やはり、図書館の専門家としては、公共図書館がリードする部分も必要ではないかというのをすごく感じている。まだ検討が必要だが、それも踏まえて、3期に入れていきたいと思う。

【委員】

専門職が一般行政職と一番違うのは、スキルを高めていって専門的な業務の質を高めつつ、業務を行うための時間も短縮していくということ。去年、40分かかっていたものが今年は30分でできるというようなことも含めて考えないと、専門職の意味、存在価値はない。そういう意味で言うと、今度の第3期の計画の中で絶対やらないといけないのは、組織の組み替え、業務の組み替え、サービスの組み替え。組織、仕事の担当、サービスの範囲を固定したまま改善しようとしても無理。そういうものを全部組み替えていかなければいけないということ。

オーテピアの組織の詳細は分からないが、例えば、サービス系と受入などを担当する資料管理系は、大きな図書館になるとどこも仲が悪い。つまり、夏休みが近づくと、サービス部門は課題図書を早く受け入れてと言うが、資料系はこっちのスケジュールがあるということになってしまう。浦安で私が館長だったときには、そういった組織の組み替えを随分やった。実際やったのと少し違うが、分かりやすく言うと、例えば、サービス系と資料管理系を一緒にする。そうすると自分たちでスケジュールを作って、サービスが円滑にできるように自分たちで考えるようになる。だから、サービスや業務を円滑にするため、質を高めるためにはそういうところまでメスを入れないと本当は駄目。

それから、以前から話しているように、過剰に手を加えている部分と、手当が足りない部分が出てきているはずなので、そういうところを見直さなければいけない。これは現場で働いてる人でないと見直せないし、専門職の視点で見ないと分からない。質を下げない合理化は、実

際にそこで働いている専門職でないとできない。だから、こういうことはボトムアップでやるしかないわけで、これを組み込まないと、ただ忙しくなって仕事が増えていだけになってしまう。

それから、優先順位の見直し。人が足りなければ、当然、優先順位の低いところは、やらなくてはならなくてもできなくなっていく。本当はあってはいけないが、そうでもしないと新しいことにチャレンジできない。先ほど話したように、社会も変わるし図書館も変わるときに、優先順位を高くしてやらないといけないものは向こうからやってくる。それは万難を排してやらないといけない。そのためには優先順位の低いところを切り捨てていかなないと生き残れない。だから、そういうことができるような態勢を作るのが、この3期の計画だと思う。

1つ良いことは、これまではこういうことをやる時に、東京や大阪の図書館の方が圧倒的に有利だった。出版社がたくさんあり、人手もあり、いろいろな情報も集まっているし、中央官庁も近い。でも、これについては、デジタル化やネット社会の発達によって、ありがたいことに差がほとんどなくなってきている。だから、大阪や東京がまずやって、地方の図書館がそれを大体真似していくというのが50年も60年も続いてきた日本の図書館のあり方だが、そんなことを気にする必要がなくやっていける時代が来ている。

具体的に先ほど話したようなことと言えば、例えば、ドローンで物を運ぶとか、無人の運搬車で家に何かを届けるということ。これは地方の自治体だと当たり前で、今、実証実験をやっている、実用化が目の前に来ている。今、お手伝いしている別府の図書館では、屋上にドローンの発着場を作ろうかということ議論している。そういうことが本当に当たり前になってきているわけなので、そういうことを検討していく。

先ほどの非来館型についても、例えば、Zoom でレファレンスをやるとか、インターネットを使ったことがいろいろできるようになるが、そういうサービスは、事務室の皆さんの個人の机、いろいろなものが山積みになっているようなところで、ノートパソコンを広げる形ではできないと思う。YouTuberのスタジオみたいなものが図書館の中に必要ではないかと思う。大きいモニターが3つぐらい並んでいて、使いやすいキーボードが用意され、カメラもセットされ、そこに順番に司書が座ってサービスするような形。そういうことがなければ、非来館型サービスなどできない。舞鶴の新しい図書館では、対面朗読とYouTuberスタジオのような機能を持った部屋を作りましょうということを今やっている。対面朗読に毎日ずっと使われているわけではないので。そういうようなことがもう目の前に来てしまっている。

この地域の課題のところでも少し気になったが、人口減少が最重要課題となっている。その下に、産業の担い手不足、地域経済の縮小と書かれている。これがごちゃごちゃに議論されてるのではないかと思う。

最近読んだものにこういうのが出てきた。ノルウェーの漁業は、女性の就業率がものすごく高い。日本では女性がほとんどいないと思う。これはなぜかと言うと、漁業が自動化されてるから。日本の漁業というと、寒い中、ずぶ濡れになって素手で網を引かないといけないような典型的な3K職場だった。ところが、北欧の漁業は、30年ぐらい前からもう全部が自動化されていて、漁船だけど温かい部屋で、機械を操作するだけで魚を取っていて、全然3Kでないという話を聞いたことがある。だから女性の就業率も高い。そういうことを考えると、人口減少イコール地域経済の縮小にはならない。本当は生産性の問題。こういうことをビジネス支援のよ

うなところで、きちんと図書館が情報発信していける展望を考える。そういうものに対して、どういった補助金制度があるかという情報を地域に提供する。それがこの県の政策とリンクしている。そういう大きい視野を持って仕事をしていくべきではないかと思う。そういう具体的な情報提供ができるのは図書館だけ。いくらこの政策をこうやろうと言っている、中身がなかったらどうしようもない。そういうものを先ほど話した非来館型サービスも含めて提供することだと思う。それを実施、実現するための時間を作るためには、組織、業務の見直しをする必要があると思う。そういうことが全部リンクしている。そういう気持ちで第3期計画を作っていたらと思う。

【事務局】

あんなに新しく最先端を行っていたオーテピアだが、後からでき上がろうとしている図書館、また、リニューアルしようとしている図書館がもっと先を行っているという現実。

今日の会を通して焦りと、やはり頭を切り換えないとできないということを強く実感した。もちろんみんな頑張っている、大切に続けていかないといけない部分もある。それに固執するわけではなく、できるかどうかは別にして、もっと違う発想ができると思うので、そういう議論をしていかないと、5年、10年経ったときに、気が付いたらオーテピア自体があれ(どうしたのか)、みたいなことになりかねないという危機感を持った。

【委員】

やはり、生成AIを使った司書AIができてしまう可能性はかなり高い。それを人間として上回らなければならないというのが現状だし、世界はそちらに向かっている。そういうときに、図書館がやらなければいけない仕事が減るとは思わないし、情報の重大性は増すばかり。例えば、従来型の読書をどう扱うのかなど、根本的な見直しが必要になってくると思う。

今、来館者数が1つの指標になっているが、例えば、人口がどんどん減少して行って、しかも少子化と高齢化が進むというときに、来館者の維持や増加に意味がないとは言わないが、そういうタイプの方をメインの利用者として考えるようなサービスの追求の仕方で良いのだろうか、やはり見直す必要があるのではないかと。そういう面で、人口動態や経済の動向も含めた社会の変化というものは、サービスの質という面でリンクするだろうと考えている。

それから、他の委員と同じで、結局、3期は社会やその他の変化を考えても、オーテピアが生き残れるかどうかの期間になると思う。最初の議題で言ったように、サバイブしていくためには支持をしてくれる人や組織を増やさざるをえない。つまり、オーテピアのサービスがなければ、自分たちはうまく仕事ができないという個人、組織をどんどん増やしていく。そのためにはオーテピアのやっていること、本質的な部分から細かい仕事の内容まで全てをなるべく多くの関係者、利用者、組織に理解してもらう必要がある。専門職の仕事をもう一度見直すという話もあった。それと同じ形で職員全てが、オーテピアのアンバサダーになって、自分たちはこういうことをしているんだと、機会あるごとにいろいろな方に説明をしていくことが必要だと思っている。必要があれば、オーテピアとして、そういうアンバサダーを独自に、どこか、どなたかに依頼することも考えても良いのではないかと。それは宣伝という意味だけではなくて、生き残

るために我々の仕事の本質的な部分の理解を求めること。それに対する正当な評価を得るためには、黙って仕事をしているだけでは少し難しい気がする。

少し時間があるとはいえ、大きな変革の目標や方向のテーマが提案されたので、事務局の方で、今日いただいた意見を十分に踏まえて、図書館の今後の運営を進めていただくようお願いしたい。

それでは最後に、議事3のその他について、事務局の方から説明をお願いします。

【事務局】

資料3

今後のスケジュール

来年度6月頃、令和7年度の第1回サービス計画推進委員会の開催を予定している。